

姫路中ブロック

姫路教会において5日(日) 11時から姫路中ブロックの堅信式が前田万葉大司教の司式で行われた。赤窄富夫神父(ブロック協力)、アルマンド・ロメロ神父(加古川)、ジュドネ・トンバ・ディバ神父(姫路)が共同司式した。受堅者16人は全員、姫路教会の信徒だったが、堅信準備中から地区の他教会の方やシスターからもアドバイスをいただき、当日も多くの人の協力と祈りに支えられて実現した喜びの式となった。前田大司教が詠んだ句は「聖霊の風と神の子櫻若葉」。聖霊降臨の時の弟子たちのように、神のいぶきを受けた受堅者たちが言葉と行いを通して、キリストをあかしていく人になるように、信仰を守り伝えることができるようにと願った。



受堅者の感想▼「幼い頃は両親に連れられて、ミサや教会学校にも参加していましたが、中学生になると日曜も学校の部活動があつて教会からは足が遠のいていました。そんな中、堅信のための勉強会で再び教会とつながり、信仰について考える機会を得たことをうれしく思います。……これからは神の愛を忘れず、キリスト者として正しい行いをしたいと思います」。

大阪北地区

聖霊降臨の日、5日(日) 14時から大阪北地区(大阪梅田、関目、今市、大東、門真、香里、枚方)の堅信式が香里ヌヴェール学院で行われた。コロナ禍の影響で合同堅信式を行うのは4年ぶり。受堅者は54人で代父母と親族250人が参列した。主司式は酒井俊弘補佐司教。長崎 壮神父、エリック・パウチスタ・デ・グスマン神父、昌川信雄神父、竹延真治神父、ハイメ・シスネロス神父、梅崎隆一神父が共同司式。朗読や共同祈願、奉納などは受堅者が役割を快く引き受け、積極的に典礼に奉仕した。説教の中で酒井司教は外国籍の保護者に配慮し、スペイン語と英語でもメッセージを送った。堅信が「教会へのさよなら」の秘跡にならないようにとの教皇フランシスコの言葉を引用し、受堅者の信仰をまず家族が成長させるよう、そして受堅者にも祈りの人となるようにと語った。



主催者の感想▼「式後の受堅者の喜んだ顔から恵みの大きさを感じました。幼児洗礼の子どものたちの保護者は特に、感慨無量のようにでした」。

姫路中ブロック・大阪北地区・かわちブロック堅信式

聖霊の風

6月は教区内で3つの堅信式(姫路中ブロック、大阪北地区、かわちブロック)が行われた。各地の喜びの声を伝える。

かわちブロック

12日(日) 11時、かわちブロック(布施、八尾、枚岡)の合同堅信式が八尾教会で行われた。酒井俊弘補佐司教の司式。受堅者は布施1人、枚岡6人、八尾16人。聖霊の恵みをいただく堅信の秘跡により、一つになったような気がした。司教の説教の通り、受堅者たちが受けた按手は使徒たちの時代からずっと受け継がれてきたもの——司教による按手と聖なる油の塗油は絶えず伝わってきた。私たちキリスト者の信仰のしるしだから。人数制限はあったが、1階と2階の聖堂は満杯になり、これからそれぞれの道で神様との関係を深めていき、信仰を成熟させていく受堅者たちのために祈った。

受堅者の感想▼「堅信の恵みを受けて心が満たされる幸せな思いとともに、大人の信仰を持つて生きていくことへの思いを新たにしました。聖霊の微かな働きに注意を向け、自分の意思でより良い行動を取れるように歩んでいきたいです。私は弱い人間ですが、堅信のしるしは靈魂に残るとのことに勇気を持ち、これから大人の信者として生きていきたいです」。「コロナ禍でも、堅信式ができてとても嬉しかったです。これで、大人への一歩を踏み出せたかなと思っています」。



『ラウダート・シ』の呼びかけに答えて

北須磨教会での小さな応答

教皇フランシスコの回勅『ラウダート・シ——ともに暮らす家を大切に(2015年)』の発表から始まった「ラウダート・シ週間」。2022年のテーマは「ともに耳を傾け、ともに歩もう」で、5月22～29日に開催された。北須磨教会では最終日の29日(日)にマリスタ教育修道士会のBr. 呉善根の呼びかけで、回勅を学び、祈り、実践するための小さな集いが開かれた。

ミサ後、集まった老若男女15人ほどを前に、Br. 呉は自ら作った飾り文字の「LAUDATO SI」のタイトルを背にして、回勅の中の「わたしたちの地球のための祈り」で集いを始めた。2015年の回勅発表以降、世界で始まった動き「ラウダート・シ運動」、そして毎年行われる「ラウダート・シ週間」での全世界のさまざまなアクションを紹介された。私たちのこの小さな集いも、そのアクション・リストに加えられていることが報告されるとどよめきが起きた。

Br. 呉は「エコロジー(生態学・自然との調和を目指す考え方)」の「エコ」の語源はギリシャ語の「オイコス(家)」であることを説明。私たちに今求められているのは「エコロジカル(生態的)な回心」であることを力強く呼びかけられ、久しぶりに「オイコス(家庭・教会)」という言葉に耳にし、目を覚まされた心持ちがした。

ブラザーによる講話の後、小さなワークショップが行われた。毛糸の玉で参加者一人ずつが互いの名前を呼んで結び合うというもの。その1本でも切れると悲しく失われた感じがすること、しかし再び結ぶこともできることをワークショップで体験し、私たちは互いに結ばれた「オイコス」であることを実感できた。

集いの最後には、教皇様の呼びかけに「ともに耳を傾け、ともに歩もう」と、これからも月1回程度の集まりを持つことを約束し、皆で「被造物とともにささげるキリスト者の祈り」を祈って終えた。(文 北須磨教会信徒 平尾享三・孝子)

